

第15回 社会情報調査の方法に関する研究会

石井 和平

インターネットという新しいメディア（インターネットを単に一つのメディアだと言い切るには問題があるかもしれないが）は、今や我々の生活に溶け込んでしまった感がある。このメディアが、日常生活から政治・経済といったシステムに至るまで、社会のあらゆる領域で大きな影響力を与えていることに異論はなかろう。このような状況の中で、インターネットを、マーケティングなどの社会意識を探る、簡易ではあるが即時性を持つ調査ツールとして活用する事例も多くなってきた。

周知の通り、この新しいメディアを用いた社会調査の方法は、その新奇性とユーザ層の偏りから「代表性」の欠如といった問題点を孕んではいるが、今後、社会調査の有効なツールになるのは確かである。インターネットの普及は、またインターネット「調査」の普及を意味するものであり、この簡便なツールを活用することは社会調査を学習する場合にも有効な手段となりうるはずである。このような問題意識に立って、2001年2月に行わ

れた第15回研究会では、「インターネット調査」を共通テーマに設定し、企業の第一線で活躍しておられるお二人から貴重な話を伺うこととなった。

講師としてお呼びしたお二人は、インターネット業界では著名な方々である。萩原氏は、インターネット・マーケティングにお詳しく、自ら企業を立ち上げたご経験から、インターネット調査の現状と課題について非常に明快に語っていただけた。また藤本氏からは、現在、津田塾大学で担当されている「情報と社会」という授業に基づいて「インターネットに媒介された《教室のインターアクション》」という表題で、具体的かつ興味深い実践経験を伺うことができた。

今回のお二人からの報告は、情報産業の現場と教育をつなぐ意味でも、貴重な機会となった。今回、お忙しい中、本学部の紀要のために玉稿をいただいたお二人には改めて感謝するとともに、今後のさらなるご活躍をご期待したいと思う。